

<b>Title</b>	黒崎幸吉のアドルフ・フォン・ハルナック論 : 『新世』に掲載された『全集』未収録の論稿をめぐって
<b>Author(s)</b>	深井, 智朗
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No. 45
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2023">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2023</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 黒崎幸吉のアドルフ・フォン・ハルナック論

——『新世』に掲載された『全集』未収録の論稿をめぐって<sup>①</sup>

深井智朗

はじめに

本論は雑誌『新世』の一九二六年（大正一五年）六月号に掲載された黒崎幸吉「アドルフ・ハルナックの印象」の復刻とその解説である。

雑誌『新世』は黒崎の論稿が掲載された一九二六年当時、約三〇〇部が印刷され、そのうち約二〇〇部が有料販売されていたに過ぎない小さな雑誌であるが、彼はこの小さな雑誌にベルリン留学時代に講義を聴いたアドルフ・フォン・ハルナックについての論稿を寄稿している。この小論は後の新教出版社刊『黒崎幸吉著作集』にも、その続編にも収録されていないので、おそらく今日までほとんど読まれることがなく、知られていなかったものと思われる。しかしその内容は一九二〇年代のハルナックの様子を紹介し、また黒崎のキリスト教や神学についての理解を知ることが出来る貴重な論稿である。そこで本論ではこの論稿を復刻し、それに若干の解説を付して資料として紹介することにした。

『新世』の全巻は、歴史家であった故秋山操氏が、『基督教会（デイサイブル）史』編纂のために利用し、現在日本

基督教団滝野川教会に保存されている資料集の中に、整理され、製本され、保存されていた。

本論執筆・編集にあたり、当時の雑誌『新世』の発行者であり、編集責任者であった故畑中岩雄氏、故黒崎幸吉氏のご遺族に事情を説明し、印刷の許可を求める手紙をお送りしたところ、それぞれにご快諾いただいたので、ここに黒崎幸吉の論稿を掲載することが可能になった。

## 1. 雑誌『新世』、黒崎幸吉、そしてベルリン留学

### 『聖書之道』から『新世』へ

雑誌『新世』は、一九二五年（大正一四年）四月から一九二七年（昭和二年）二月まで四八頁建ての雑誌として刊行されたが、それ以前は『聖書之道』と称する「基督教会（デイサイプルス）」の教団機関新聞であり、昭和二年以後は、『新世』という同じタイトルでタブロイド版八頁の同教団のニュース紙となった。大正末期から昭和初期にかけてのわずか二年間だけ発行された雑誌である。

『聖書之道』は、一九〇一年（明治三四年）四月に福島で開催された基督教会同志大会（年会）で刊行が決議され、C・E・ガルス、H・H・ガイ、宮崎八百吉が編集準備委員となり、同年六月、「新聞の四分の一大、一二頁、毎月下旬発行、一部定価三銭」で刊行が開始された。発行人は「築地居留地四四番館C・E・ガルス」、編集人は「小石川区小日向台町一丁目四番地H・ガイ」であり、実際の編集は宮崎がひとりであつていた。<sup>2)</sup>

一九〇四年（明治三七年）一〇月一三日から聖学院教会で始まった同教団の年会の報告書に次のような記載がある。

『聖書之道』は同年七月に編集経営を日本人に移すこと（経費として毎月一六円五〇銭をミッションより支給）を決定したので、これについて協議が行われた。大阪の平井（庸吉）牧師は『本誌の発行部数は四五〇部、購読部数二〇四部、大阪で伝道用として一〇〇部を使用してきた。現在の編集発行人は一先ず辞任する』と報告しており、それにもない一九〇四年（明治三七年）一月から一九〇六年（明治三九年）八月までは村山敏雄が編集を担当している。

しかし村山の編集長時代『聖書之道』はしばしば休刊となり、編集が責任的になされていなかったために、一九〇六年（明治三九年）になって雑誌は再びミッションに復帰することになり、M・B・マデンが編集を担当することになった。

一九二三年（大正一二年）の『聖書之道』の経営状況を示す資料が残っているが、それによれば一九二二年（大正一一年）「六月より本年五月までの収入七六二円（うち年会費補助六〇円、ミッション補助一八三円、購読料二七円、広告料七六円、前年度よりの繰越一二円）、支出九一〇円」<sup>4</sup>で、かなりの補助をミッションから受けているにもかかわらず、一五〇円以上の赤字であることがわかる。

翌一九二四年（大正一三年）になり、『聖書之道』の刊行継続についての審議が行われ、その年の四月の総務委員会で、『聖書之道』の将来計画がまとめられ、一九二五年（大正一四年）の年会でその案が承認された。その案は文書伝道の視点から、『聖書之道』を『新世』と改題し、教団の機関紙であるよりは、より広く日本のキリスト教界のオピニオン雑誌となることを目指して、専従の編集担当者指名するというものであった。

年会報告書によれば、「雑誌専任主筆として畑中岩雄牧師（大阪玉出教会）をわずらわすこと、新計画は一四年四月一日より実行に既に移されている」<sup>5</sup>となっている。また「雑誌は基本的には四八頁建てとし、一ヶ月の雑誌経費二七〇円、主筆の俸給手当てを加えて三六〇円、収入見込み一〇五円、差引き二五五円の赤字は総務委員会会計から補填する。雑誌は三ヶ月以内に独立する」<sup>6</sup>という付帯決議もなされていた。

黒崎の寄稿があつた一九二六年（大正一五年）六月現在の『新世』は、定価三〇銭。送料一銭。編集兼発行人は東京市外杉並町馬橋三六の畑中岩雄、印刷人は東京市外池袋一六三〇の小谷実、発行所は畑中と同居所の新世社となつてゐる。印刷部数三〇〇部で、有料購読は二〇〇を下回るようになっていた。雑誌はA5版で、各号五六頁であつた。

さてこれにもなつて畑中は一九二四年（大正一四年）三月に上京し、同年九月から新しい雑誌の刊行が開始された。『新世』には旧聖学院神学校関係者、あるいは「基督教会（デイサイプルス）」派の牧師や信者などが寄稿してゐただけではなく、広くキリスト教界全体からも原稿がよせられてゐる。執筆者には畑中岩雄はもちろん、渡辺善太、小田信人、友野三恵、高柳伊三郎、本多羔六、井上吉次郎、金子白夢、平野国利、御木本隆三、郷司浩平、毛利官治、鈴木一樹、杉浦貞二郎、そして黒崎幸吉等が加わつており、内容も聖書学や神学に限らず、文学、経済、政治、芸術論など広く選ばれてゐる。

しかし雑誌としての『新世』は発行部数を伸ばすことができず、結局一九二七年（昭和二年）六月からは、再び教団内機関紙として、タブロイド版八頁の教団内の情報を扱う新聞にもどつてゐる。この時点で印刷部数はやはり三〇〇部で、有料購読者は出納簿によれば二〇三名であつた。<sup>(7)</sup>

### 黒崎幸吉

黒崎幸吉が『新世』にハルナックについての論文を寄稿することとなつた経緯は不明であるが、おそらく鶴岡にあつた鶴岡基督教会との関係のためであろう。黒崎は一九二五年欧州留学直後、郷里の鶴岡に戻つており、そこで「基督教会（デイサイプルス）」の鶴岡基督教会との関係が生まれてゐる。一九二六年（大正一五年）の同派「秋田教区報」によれば、鶴岡教会の「熊田亀之助氏は黒崎幸吉氏を招き毎週藤島で聖書研究会を行つてゐる」とあり、黒崎自身も「鶴

岡市に古くから存在した若葉町教会の牧師白井為治郎氏も旧知の先輩であったので、その教会で時々講演などをするようになった<sup>(1)</sup>と書いている。

黒崎幸吉は一八八六年（明治十九年）に山形県鶴岡市に、黒崎研堂の長男として生まれた。研堂の父は庄内藩家老をつとめた酒井了明の三男で、後に彼は黒崎友信の養嗣子となった。研堂は庄内における書道興隆の基礎をつくり、書道家松平穆堂、吉田芭竹など多くの門弟を育て、他方で金融機関済急社（後に荘内銀行の前身六十七銀行に吸収された）の社主をつとめるなど庄内の経済界の指導的役割を果たしてもいた。

その長男黒崎幸吉は、一九〇七年（明治四〇年）に東京の第一高等学校を卒業し、法科大学（現在の東京大学法学部）の政治学科に入学し、上京し、一九〇九年（明治四二年）一〇月から内村鑑三の聖書研究会に出席するようになった。一九一一年（明治四四年）に大学卒業後、住友総本店に入社し、高木寿美子と結婚している。その間経理課主計係り、住友家嗣子住友寛一の補導係（一緒に渡米）、住友製鋼所副支配人などを歴任した後、一九二一年（大正一〇年）、妻寿美子の急逝後、伝道者となる決心をし、住友を退職し、内村鑑三の指導を受けつつ、その準備にあたっていた。

### 黒崎の欧州留学及び本論の執筆時期について

黒崎は一九二二年（大正一一年）欧州留学に出発し一九二五年（大正一四年）三月に帰国するまで、ドイツ、スイス、イギリスなどで各地の大学を訪ね研鑽を続けた。帰国後は『永遠の生命』誌を創刊し、鶴岡、神戸などに住み、さらに有名な『注釈新約聖書』、あるいはギリシア語辞典や文法書などを執筆し、無教会の指導者として、また新約聖書学者として、さらには著作家として広く知られるようになった。

黒崎は一九二二年（大正一一年）に欧州留学で出かけているが、それは第一次世界大戦後で、敗戦国となったドイツ

と、戦勝国となつた日本のとの違いを身をもつて経験する時でもあつた。黒崎によれば、彼は欧州留学にあつて、住友の退職金として得た住友の株を担保に一万円の融資を受けている。「当時のドイツは第一次世界戦争に敗北し、カイゼルの退位となりドイツも一つの共和国となり、非常に貧困に陥りマルクの価値が非常に下落した時であつたので、私は悠々として足掛け四年、前後二年半余の滞在の旅費のほか、英、仏、伊、スイスなどにも行き、特に英国とスイスには一学期ずつ滞在して勉強もできるくらいであつた」。「ベルリン滞在中」間に大学生からギリシア語やラテン語を教へてもらふことができた。当時ドイツは一般に戦後の貧困に苦しんでおつたので、アルバイトのために教へてくれる学生はいくらでもあつた。謝礼は一回何千マルクとかいふので彼らにとっては大金であつたが、当時の日本金にして一回十六、十七錢、まったく相済まないような額であつた。しかしこれによつて私はどれほど助かつたか分らない。信仰の本質的なものについては別に教へられることはなかつたけれども、ドイツの学者の学風については学ぶところが非常に多く、日本の大学に比較して羨ましい点が沢山にあつた。しかし、それと同時にドイツの学風の特徴もこれを感じることができ、その背景の下にドイツの学者の業績を参照することができるようになったことは、非常に有り難いことであつた」。

その後黒崎はチュービンゲンで学び、さらにはジュネーヴに滞在し、名著『カルビン伝』のもとになる研究をなしている。ジュネーヴでは当時国際連盟の次長であつた新渡戸稲造や日本政府代表として国連に駐在していた前田多門一家との交流を楽しんでいる。さらに英国に滞在し、帰路パレスチナとエジプトに立ち寄り、一九二五年（大正一四年）三月三日に神戸に帰国した。

翌三月四日には郷里の鶴岡に戻り、そこでキリスト教伝道者として活動し、また『永遠の生命』誌の編集、発行、そして旧制の山形高等学校で英語やドイツ語を教へている。とりわけ一九二八年（昭和三年）に山形高等学校を辞して、執筆を開始した『注解新約聖書』全十巻は、植村正久の影響を受けた富士見町教会員横尾留治の経営する日英堂の依頼

によつて執筆が開始され、一九二九年（昭和四年）に刊行が開始された。その後一九三〇年（昭和五年）一月に関西に転居するまで、黒崎は鶴岡に留まつた。<sup>(14)</sup>

本論に収録した「アドルフ・ハルナツクの印象」は『新世』の一九二六年（大正一五年）六月号に掲載されているので、黒崎が欧州留学より帰国して一年以内のいずれかの時期に書かれたものであり、既に述べた鶴岡教会の白井牧師、また同教会との交流の故に執筆が依頼され、書き下ろされたものと考えるのが自然である。<sup>(15)</sup> また『新世』大正一五年四月号の「簡編後語」という編集者による「あとがき」の中に「畑中記」と付されて、「黒崎幸吉氏から『アドルフ・ハルナツクの印象』と云ふ御文章が戴いてあるから六月号に掲載する」とある。この「あとがき」が記された四月号には「大正一五年四月二十八日に印刷納本」とあるので、「あとがき」自体は一九二六年（大正一五年）三月、あるいは四月に書かれたものと思われる。それ故に黒崎の論稿の受理はそれ以前であるから、欧州留学から帰国後一年以内、一九二五年（大正一四年）三月から一九二六年（大正一五年）三月の間のいずれかの時期に書かれたものと判断して間違いないであろう。

## 2. 一九二〇年代のアドルフ・フォン・ハルナツク

### アドルフ・フォン・ハルナツクとは誰か

さて次に黒崎幸吉がその「印象」を記したアドルフ・フォン・ハルナツクについて、また彼がベルリン大学で講義を聴いた頃のハルナツク、すなわち第一次大戦後、ヴァイルヘルム帝政期が崩壊し、ヴァイマル共和国の混乱の時代に晩

年を迎えていたハルナツクについて解説しておきたい。

アドルフ・ハルナツクは、一八五一年五月一七日にドイツの教会史家テオドシウス・ハルナツクを父に、また法学者グスタフ・エーヴェルスの娘マリーを母にドレパトに生まれている。<sup>(19)</sup>このドレパトは今日のエストニア共和国のタルトゥウであり、ハルナツクはこの母を通してリボニアの貴族の世界と結び付き、他方でプロイセンの政治的権力とロシア文化との間の葛藤という難しい政治的情況の中で育った。それ故に彼は一方でプロイセン的なものへの反発と同時に複雑な憧れを持ち、他方で家ではドイツ語とロシア語とを使いこなすという国際政治の只中で育った。<sup>(20)</sup>

父ハルナツクはロシアのペテルブルクの出身で、幼少期にヘルンフト兄弟団やJ・E・ゴスナーの影響を受けている。彼はドレパトとドイツの諸大学で学んだ後、ドレパト大学神学部の定員外教授、正教授を歴任し、ある時期はエランゲン大学の客員教授としてルター神学（とりわけルターの神学に基づいた実践神学）についても講義している。

子ハルナツクの教会史家としての仕事は多岐にわたったが、とりわけ古代教会の研究においては多くの業績を残した。彼の研究はグノーシス主義の研究にはじまり、マルキオンの研究に終わったが、その間に有名な『教理史教本』（一八八五〜八九年）、『古代キリスト教文学史』（一八九三〜一九〇四年）、『初期三世紀におけるキリスト教の伝道と伝播』（一九〇二年）等の大部の著作を発表している。<sup>(21)</sup>

アドルフ・フォン・ハルナツクの生涯は日本で考える神学者のイメージと大きく異なっている。もちろん彼の活躍の舞台の中心はベルリン大学神学部であり、「類まれな偉大な教会史家」<sup>(22)</sup>であり、「他の追随を許さぬ学問的エリート」<sup>(23)</sup>であり、「資料の扱いの巧みさと厳密さにおいて飛びぬけた力量を持った歴史家」<sup>(24)</sup>だったが、同時に彼は王立図書館の館長であり、カイザー・ヴィルヘルム學術振興財団（現在のマックス・プランク研究所の前進）<sup>(25)</sup>の初代の総裁でもあった。<sup>(26)</sup>またハルナツクはこの時代の文教行政と深く関わり、皇帝の理想とする臣民教育の確立のために、とりわけ今日教養市民層と呼ばれるようになったドイツの知的階層の純粋再生産のプログラムを構築しつつあった。

ドイツ・ルター派教会に基盤を持たない神学者としてのハルナック、あるいは「神学部の神学者」、「教会外のキリスト教の神学者」としてのハルナック

ハルナックの学問的な業績外を紹介することは簡単ではなく、またここでの課題を越えることなので、詳細は省略せざるを得ないが、ここで重要なことは、ハルナックがどのような立場で神学という学問を営んでいたのか、ということであると思われるので、その点を明らかにしておきたい。

ハルナックは既に述べた通り、ドイツのプロイセンの出身ではなく、また彼はルター派であったが、プロイセンのルター派教会との関係は希薄で、当時の周辺国家、リトアニアのロシア語を母国語とする地域の出身で、当時のルター派教会ではいわば傍流の出身であった。このことはハルナックが神学者としてヴェイルヘルム帝政期に生きて行くために決して小さな問題ではなかった。というのはこの時代のルター派主流派のドイツ・ナシヨナリズムはハルナックのような経歴の神学者を受け入れることができないような体質であり、人事やルター解釈においてハルナックはその優秀な学問的な成績に比例する評価を得ることはできなかった。

それ故に神学者ハルナックの支持母体はプロイセンの保守的・伝統的なルター派ではなく、彼の学問的な業績を宗派政治から切り離して評価することができる大学であり、新しく生まれたドイツ帝国 Reich における皇帝による中央集権的な宗教政策に異議をとらえ、各領邦 (Land) の教会と神学教育の独立性に固執したルター派ではなく、帝国の人倫の基盤となるべきルター派という国家宗教であった。つまりハルナックはこの時代の宗派政治のコンテクストの中では伝統的な領邦教会に支持層を持たない神学者なのであり、必然的にそれ以外の支持母体の中で神学を営むことを迫られた神学者であった。

そのことは第一にハルナックがベルリン大学神学部の歴史神学の教授となる人事は、当時のベルリンの福音主義教会協議会が否決したため、一旦その招聘人事は白紙となり、それを当時の宰相オットー・フォン・ビスマルクが教会協議会と議会人事委員会の決定を飛び越えて、改めて彼を任命するということによつて可能となったことから明らかである。第二に、事実ハルナックは神学部の中で活動したというよりは、ベルリン大学、あるいはベルリンの王立アカデミーを舞台として活躍した神学者であつたと言つてよい。<sup>27)</sup> ハルナックの業績を高く評価し続けたのは、教会ではなく、たとえば古代ローマの研究で有名な歴史家テオドル・モムゼンであり、<sup>(28)</sup> また彼の名を世界に知らしめることとなつた『キリスト教の本質』は神学部の講義ではなく、彼が大学の学部を越えて行つた神学部の教授会の決定ではなく、大学理事会の決定による講義がもつたことからも、彼の神学の大学行政上のコンテクストが明らかになるであらう。

そのことは逆に見れば、プロイセンのルター派の支持がない以上、彼は教会の外に彼の神学者としての活動を支持する母体を、また読者を見出さねばならなかつたのである。それが彼へのラベリングとして今日に至るまで知られている「学問的神学」という立場の社会的・教会政治的なコンテクストである。それは彼の意図的な行動であるというよりは、この時代の教会政治の中で作り出された対立構図であつて、プロイセンではなく、ドイツの周辺小国からやつてきたハルナックにとつては「神学部の中で神学を営む神学者」である以外の道を彼の学問的なパフォーマンスとして選択することは困難であつた。

このような教会政治のコンテクストは第一にハルナックを教会政治から切り離し、彼が神学を営む場所を大学やアカデミーの中に求めることになる要因となつたが、彼は同時にこの時代の制度としての教会への不信を持つようになつた。その結果彼はキリスト教それ自体や信仰を否定したり、疑うことは無かつたが、彼はこの時代の教会という制度に疑問を持つ、「教会外のキリスト教」に限りなく接近することとなつた。「教会外のキリスト教」とはこの時代の政治

的、神学的コンテクストの中では啓蒙主義の影響を受けたキリスト教のことで、トゥルツ・レントルフが言うように、「宗教的であるが、教会的ではないキリスト教のこと」<sup>(29)</sup>である。ハルナツクの立場はこれと完全に同一視することはできないが、彼はそれに接近し、またこの立場に政治的に同調している。それが有名になった『キリスト教世界』紙上における「使徒信条論争」への彼の介入の社会的コンテクストでもある。

さらにハルナツクはこの時代の保守的なドイツ・ルター派とは違った意味でのナシヨナリストであった。この時代のドイツ・ルター派は保守派もリベラルもみな新しく生まれた帝国へのナシヨナリズムという点では一致していた。ルターの宗教改革とルター派は新しく生まれた帝国のナシヨナル・アイデンティティーの要でもあった。一七世紀のピューリタン革命ではなく、一八世紀のフランス革命でもなく、一六世紀のルターの宗教改革と「キリスト者の自由」の発見こそが、近代の始まりであるというのが遅れてきた帝国ドイツのナシヨナル・アイデンティティーとナシヨナリズムの要であった。

しかしハルナツクのナシヨナリズムは他のルター派のナシヨナリズムとは少し性格を異にしていたと言ってよいであろう。それは「逆立ちしたナシヨナリズム」と言ってもよい。既に述べた通り、彼はリトアニアという周辺小国の出身であり、プロイセンのルター派においても周辺部に置かれていた。彼は家庭ではロシア語を話していた程であり、とりわけ母方の家系から大国ドイツへの複雑な国民感情を持った自立心を受け継いでいた。そのことはハルナツク自身が自覚する以上に、周囲の人々にとつてのハルナツクの見方でもあった。それ故にハルナツクはドイツ帝国における神学者であるために、他のドイツ・ルター派の神学者以上にドイツ的であることを政治的には示す必要があった。それは彼の経歴から来る周囲の疑念を払拭するためであり、彼自身の立場を明瞭にするためでもあった。彼は誰よりも強くナシヨナリズムを提示することで、その立場を確立して行つたのである。それは周辺小国から中央の政治機関の頂点へと、ドイツ・ルター派の宗派政治的コンテクストとは別に駆け上つたハルナツクの中にあつた「逆立ちしたナシヨナリズム」

であった。

そのことが第一次世界大戦においてはハルナツクの両義的な立場として現われ出た。ひとつには、ハルナツクはドイツ・ナショナリズムの立場から、国際政治におけるドイツの立場を守るためにこの戦争を支持することを表明し、他方で、北欧や東欧小国との深い繋がりから戦争回避のための政治的工事を非公式に開戦と同時に続けたのであり、後者のハルナツクの政治的な行動は最近まで明らかになっていなかった。

## 一九二〇年代のハルナツク

さて黒崎がハルナツクを訪ねたのは、このようなヴェイルヘルム帝政期のドイツが、第一次大戦によつて崩壊し、ヴァイマルでの共和制が混乱の中に始まった時期であった。一九一八年が皇帝と各王家の退位と亡命の年であるから、それから先ずか数年のドイツを黒崎は訪れたのである。

第一次世界大戦についてのハルナツクの見方はここで充分に説明することは難しいが、戦後ハルナツクは道徳と人倫、真理の探究と国家の存続、愛国心の再建という課題を教会の中にはなく、学問の再建の中に見出そうとし、またドイツにおけるキリスト教の再建の課題を社会的な問題や国際政治にまったく無感覚なルター派教会ではなく、大学の神学部の再建の中に見出そうとしていた。<sup>(30)</sup>

ハルナツクは第一次世界大戦中の経験から、ルター派教会の中にある保守性やドイツの伝統的な政治や経済のシステムの結びつきが、理由なき反デモクラシーや反資本主義へと至ったことに失望し、またそのことに無防備で何の歴史的な理解も展望も持たない保守的な教会や牧師に危機感を感じていた。それ故に戦後のドイツの再建をハルナツクはドイツにおける神学教育、広くは大学やアカデミーの再建の中に見ていた。自ら諸外国にドイツの学問の政治的危機を説

き、ドイツの経済的困窮を理解し、大学や諸教育機関の再建のために諸外国が緊急の援助をするべきであることを主張し、講演し、かつての留学生に手紙で訴えた<sup>(31)</sup>。何よりも神学部が歴史的認識と高い倫理性をもった牧師を養成することが必要であることを力説し、そのために自らの責務を果たそうとしていた。そのためにハルナックは再び教会当局と見解を異にすることになり、常に政治の中枢にあり、ヴィルヘルム帝政期崩壊後も新しい政府の学問行政の一翼を担うハルナックを教会は批判し続けた。

### カール・バルトとの誌上論争

他方で、黒崎がベルリンを訪ねた一九二二／二三年の冬学期から一九二三年の夏学期にハルナックは思ってもみなかった勢力からの批判を受けることになった。それはカール・バルトを代表とする、いわゆる「ヴァイマルの聖なるフロント世代」からの批判であり<sup>(32)</sup>、それは有名な『キリスト教世界』誌上における論争となり、今日では「ハルナックⅡバルト往復書簡」として知られているものである<sup>(33)</sup>。

これはハルナックにとつてはルター派リベラリズムの立場ではなく、また当時の保守派のルター派でもなく、第三の立場からの彼の神学への批判であり、思ってもみなかったものであった。彼の立場への従来の批判は「当時のルター派教会の神学」からの批判であつたが、バルトの立場は必ずしも「この当時のルター派教会の神学」の立場からの批判ではなく、むしろ、教会や大学、すなわちヴィルヘルム帝政期に生み出された前世紀の保守的な社会機構全体への批判として登場したものであり、この時代の神学や宗教のみならず、社会のあらゆる領域において起こっていた既存の社会システムへの批判と趣旨を同じくするものであった。

それ故にこの論争において重要なことは、日本でしばしば紹介されているように、教会の神学の代表者カール・バル

トと学問的神学の代表者ハルナツクとの対立ではなく、実はハルナツクもバルトも、教会批判という点では当時の既存の宗教制度としてのドイツ・ルター派には批判的であつたのであるから、むしろいかなる神学が学としての神学なのか、ということ、また学としての神学の営まれる場所は本当に大学神学部でなければならないのか、また歴史主義は真の学問の方法なのか、学問の方法としては、「前提としての方法論ではなく、対象が要求する方法論というものがあるのではないか」という問題をめぐつて両者は争つていたのである。すなわちバルトはゲオルゲのサークルやゲオルク・ジンメルなどの他のフロント世代と同じく、学問は大学でなくとも営まれることは可能であり、知の新しい形態を模索していたのである。彼はいわば「神学部外の神学」を考へていたのである。<sup>(34)</sup>

### 3. 黒崎幸吉におけるアドルフ・フォン・ハルナツク

これらのハルナツクの神学的立場が、無教会の指導者内村鑑三の影響のもとで伝道者となり、大学は法科大学であつたが、自力で神学を学んだ黒崎にどのような影響を与えたのであろうか。また具体的には黒崎幸吉はベルリン大学で、どのような意味でハルナツクの影響を受けたのであろうか。それが今回復刻された小論から読み取られるべきもつとも重要な点である。最後にその点に触れておきたい。

この論稿から読み取れる、黒崎が受けたハルナツクからの影響とは、神学の学問性についてのハルナツクの考え方であろう。黒崎は次のように述べている。「ハルナツクの場合の如きは無蓋蔵なる彼の知識の宝库より彼の科学的能力を以て自由に必要なるものを取り出すが故であります。其處に彼のオリヂナリティーが明らかに見え、其處に彼の学者らしさが明かに表はれて居りました」(二〇六頁)。また「ハルナツクの如きはあれだけの博識を以て希臘、拉丁の原書殊に

其の古典を涉獵し、之より彼の学説を組立てて居り乍ら、其處に其の知識の爲めに左右せらるる事無く、其の奥底に流るる深い信仰が其の知識を従僕として使つて居るのを見て誠に羨ましく思つた次第であります」(二〇七頁)。さらには「唯ハルナツクを以て代表せられし此の独逸の科学の立場の極めて尊い点は、飽く迄も科学的良心に忠実であつて、眞を眞として少しも遠慮しない事、そしてそれが信仰に益するや否やによりて之を曲げない点にあると思ひます。そして此の正直なる態度が却て信仰に其の常然の地位を与え、又同時に知識に其の本来の地位を与えて此の両者をして其の使命を全ふせしめる事と思ひます」(二〇八頁)。

第二に黒崎はハルナツクの思想や学者としての発言の中にあるナシヨナリズムに心地よい響きを感じていたと思われろ。ハルナツクが一九二三年にフランス軍がドイツのルール工業地帯を賠償金未払いを理由に再占領した際に彼が講義のはじめに述べた言葉を記憶していて、「此日ハルナツクは蒼白の顔をして教室に出てきました。そして学生に向つて、涙を流して此の非常なる国辱について語り、かかる時には到底講義をする気は出て来ない」(二〇九頁)と報告している。別の文章の中では「ここに七十五歳の老愛国学者を見ることができてうれしかった」<sup>(36)</sup>。これは政治的ナシヨナリズム、愛国主義への共感というよりは黒崎が内村から受け継いだ日本への愛と響きあうものをハルナツク中に感じていたのかもしれない。

しかしこの論稿でもつとも注目すべきは、黒崎がこの時点で、ハルナツクの神学的立場の問題点を指摘している点で、それは歴史主義批判(あるいは合理主義批判)と終末論とそれに基づくキリスト教の現実理解の問題である。

まず黒崎は次のように述べている。ハルナツク「の著書及彼の講義の中に常に私の感ぜざるを得ざる点は、彼の人格があまりに円満であり、彼の頭脳があまりに明晰であるが爲めに、パウロ其他の使徒達の人格の複雑さを十分に味はず、又初代教会に於ける信徒の心を十分に汲み取る事が出来ないのではないかと思ふ様な事が屢々ありました」(二〇九頁)。それはハルナツクの歴史研究の中にある歴史主義的な態度への批判であり、この時代繰り返しハルナツクが受け

ていた批判でもある。そのことはたとえばハルナツク自身が一九二六年にボンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学で行った講義の中で次のように述べていることから明らかである。「私は、近年、少なくとも四度、まったく異なった立場の神学者たちから、次のように批判されているのを読んだ。すなわち、今やキリスト教の歴史及び教義の認識について、新しい原理と新しい方法とが提示されねばならない。これに基づいて全てがやり直されねばならない。もちろんそのためには多くの時間が必要とされるであろうが、それによつて、時代遅れになつた歴史主義や、古くなつた神学と入れ替えるに足る眞の満足<sup>(36)</sup>を約束する」と。

黒崎自身はハルナツクの神学の行きすぎた合理主義、あるいは歴史主義的な方法をゆるやかな表現で批判しているのであり、そのことは、黒崎が「科学的研究より得たる真理は、基督教の真理と一致する事も有るべく、又一致した事も有るであろうと思ひます。又信仰を養う為めになる事もならない事も有ると思ひます、故に私は科学的信仰と云ふ様な事は六<sup>(七)</sup>かしい事であつて矢張り *Credo, quia absurditas* と云ふ立場を取るものであります」(二〇八頁)と述べていることから明らかである。この点で黒崎の批判は晩年のハルナツクに向けられた当時のドイツ神学界における批判と同じものである。

しかし黒崎は、さらに一歩進んで、ハルナツクの歴史主義的な方法論が歴史的研究に与える弊害、また初代教会とパウロの終末論の誤解などを指摘している点が重要であろう。彼は次のように述べている。「例へば初代教会に於けるキリストの再臨を待つ心の切であつた事の説明や、キリスト及弟子達が此の考を持つて居つた事の理由を凡て當時のユダヤ人の間に行はれて居つた終末思想をイエス及初代の教会が其まま取入れたのであると解し、然らざるに於ては、イエス自身の中に現在の神の国と未来の神の国との二つの神の国の觀念が矛盾して存在する事となり不可解であるとして居る点などは、どうしてもハルナツクの理智的の性格には人生の奥底に潜む其深の罪感と之より生ずる現世に対する絶望との意味が甘く取れないからであろうと思はれます」(二〇九頁)。

これはハルナツクの初代教会史の見方への批判であるが、同時にこの時代の神学を支配していたリッチュル学派の神の国理解、あるいは終末論、そしてそれに基づいたキリスト教的市民社会論の根本を批判するもので、後にヴァイマーの聖なるフロント世代の神学者たちから、カント化されたリッチュル学派の神学による「神学の倫理化」として批判されるようになった問題であり、黒崎はわずか二学期の講義を聞くことを通してそのことを感じ取り、この短い論稿の中でそのことを適切に指摘している。

また黒崎はハルナツクの中に、学問と信仰との結びつきや関係のひとつの理想の姿を見出しつつ、その限界を感じており、黒崎自身はアンセルムスの「不合理なるが故にわれ信ず」という立場に立ち返ろうとしている点で、次の時代登場してくるカール・バルトの神学（まさに一九二二年はドイツでバルトの『ローマ書注解』の改定第二版が出版された年であった）をはじめとする次世代の神学的動向と繋がる時代的センスを持つていたというべきであろう。

この論稿をきっかけに黒崎とハルナツクにおける「宗教と愛国心」という問題を考えてみる必要があると思う。あるいはこの時代の「教会外のキリスト教」や「神学部外と神学」と日本の無教会運動を比較してみることも重要であろう。さらには約一〇年前に、やはりベルリンでハルナツクの講義に出席していてそれをもとに一九一二年に「かのよう」に」というハルナツクを題材にした短編小説を書いた森鷗外と黒崎幸吉のハルナツク理解の比較、とりわけナシヨナリズムの問題をめぐつて、という研究もなされるべきであろう。しかしこれらは全て今回新しく見出された黒崎の古い論稿の解説の域を超えるものであるので、ここでは課題を指摘するに留めねばならない。



## 「アドルフ・ハルナツクの印象」<sup>(37)</sup>

黒崎 幸吉

一方学者の方面よりは世界の珍品の如くに思われ、他方保守的な基督者からは、悪魔の隊長の様に阻まれて居るハルナツクについての短い印象を記して見ようと思ひます。

私が伯林大学に居つたのは一九二二―三年冬学期と一九二三年夏学期即ち一ヶ年間であります。<sup>(38)</sup> 此間毎週四時間のハルナツクの講義には缺かさずに出席して居ましたから可なり深い印象を受けました。個人的に面会した事は一回しかありません。ゼミナールに出なかつたので唯講義を聴いただけであります。<sup>(39)</sup>

丁度始めてハルナツクの講義をきいた年に彼は七十二歳位であるとの事でした。(日本の年で云へば七十四五です) 背の高いスラリとした体格で、顔は独逸人としては温和な方ですが、併し英米人の様な俗な顔ではありません、如来にも学者らしい顔をして居りました。頭髮は八分通り白く、腰は曲つては居ませんが歩く時などは如何にも老人らしい足つきをして居ました。学校への出勤は常に自動車に乗つて人に助けられて乗降して居りました。

教室は二百人以上入る室ですが、聴講生が多いので何時も満室で、早く行かないと善い席を取る事が出来ない位でありました。欧州戦後で基督教が最も勢力無き時であつて神学生の数も非常に少なくなつて居つた時であり乍ら、ハルナツクの講義だけは何時も満員であるのは、矢張り他の哲学、法律、経済等の諸科の学生も聴講に来るのと、世界の各国から彼を聞かんに集まる学生が多いからであります。

私が居つた時の彼の講義の題目は冬学期には「新約聖書緒論」で、夏学期には「教会史」でありました。教会史の講義は別に本講があり一週間四時間づつ三年を費やして居りますが、此のハルナツクの教会史は例外的に臨時に一学期で全教会史を講じたのであつて、彼の如き博學を以て始めて、かかる簡にして要を得た講義が出来るだろうと感心しました。彼の講義は極めて流暢で明瞭であります。原稿はあまり見ません。驚く可き記憶力と極めて明瞭なる頭腦を持つて居ると云ふ事を感じずには居られませんでした。此の点に於て確かに、今日の学者中の学者である事は何人も否定する事が出来ないと思ひました。其の講義は実に面白く少しも飽かずに聴く事が出来ます。時々諧謔をも交へて學生を喜ばし乍ら、而も要点要点は実に箇切のよい結論を以て結んで行く處、彼一流の處があります。私は日本で法科大学の學生時代の經驗により講義と云ふものは面白くないもので、筆記と云うものは面倒なものと云ふ事が深く腦裏に入つて居りました。そして独逸に行つて講義をきき始めて大学の講義を云うものは面白いものであると云ふ事を知り、そして特にハルナツクの講義は実に興味津々たるものがある事を覚えたのであります。其理由は明らかであつて日本の學者の多くは欧米の學者の説を紹介するか又は竊み取つて居るに過ぎないのに、ハルナツクの場合の如きは無蓋蔵なる彼の知識の宝庫より彼の科學的能力を以て自由に必要なるものを取り出すが故であります。其處に彼のオリヂナリティーが明らかに見え、其處に彼の學者らしさが明かに表はれて居りました。

基督教は本来學問では無いと思ひます、夫故に學問的の優劣は直に信仰の優劣を定むる標準にはならないと思ひます。併し日本に入つて来た基督教が一方學問を無視せる社會的運動又は狂信的宗派があると同時に、一方學問的基督教は其の信仰を失ひ力なき熱なき形骸となりつつあるを見る時、何とかして信仰を基礎とせる基督教的知識が日本にも、もつと広まらん事を願はない訳には行きません。而して日本で少しく基督教を學問的に研究し始めるや否や活ける信仰を失ふ所以は、全く基督教を學問的に取扱ふだけの信仰と靈力とが無く全く學問によりて支配せられ、信仰か知識の從僕になつてしまふからであると思ひます。アンセルムスと同じく「識らんが爲めに信ずる」事が必要であつて知つて

5 後、信を失ふ様であるならば知らざるに如かずであると思ふのであります。そしてハルナツクの如きはあれだけの博識を以て希臘、拉丁の原書殊に其の古典を涉獵し、之より彼の学説を組立てて居り乍ら、其處に其の知識の為に左右せらるる事無く、其の奥底に流るる深い信仰が其の知識を従僕として使つて居るのを見て誠に羨ましく思つた次第であります。日本に居つて初代基督教の文献を其の原語を以て読みこなし、之によつて自己の学説を立てる事の如きは中々容易ではありません、日本の基督教学界は常分外国人の研究の又聞きに満足しなければならず、将来とも固有の材料に少き日本の基督教社会は学問的には容易に欧州に比較し得ないだらうと思ひます。

而もかかる又聴き、又は些少の知識が信仰を破壊し一つあるのを見ると実に悲しまざるを得ません、日本にもハルナツクの様な学者が一人でも有つたならばと思はれました。

10 而して学者としての彼の純粹に学問的真理を求めて生きて居る事を認めざるを得ませんでした。其事を特に明らかにする事が出来たのは彼の博士号獲得の五十年祝賀の時でありました。当時独逸は困難なる国情にあつたので、其の式は極めて簡単でありました。学生が教室の教壇をタンネン樹の青葉を以て裝飾し、ハルナツクの入り来るのを待つて拍手して彼を迎えました。そして学生の総代が彼に祝辞を呈して、彼の国家の爲め又学术界の爲めにせる貢献を賞讃し、而して学生に対する親切なる薫陶と、学生が之により信仰上受けし感化とについて感謝を呈しました。之に対するハルナツクの答は略左の如きものであつたと記憶して居ります。<sup>(40)</sup>

15 「私は博士号受領五十年記念の爲めに国家、社会から多くの祝賀を受けました、併し其中に於て最も愉快な祝賀は、此の最も簡單なる学生諸氏より受くる祝賀であります。併し私の諸君と共に爲し来りし研究は真理 Wahrheit の爲めでありまして、徳を建つるが爲め Erbauung ではありませんでした。私の研究が或は諸君の信仰の爲めになり徳を建つるが爲になつた事もあるかも知れません。併し是は別問題であります。私は唯

真理を求めて今日に至り、今後も亦之に終始しようと思ひます、そして諸君と共に此の研究を継げるのが私の終生の事業であるからして諸君より受くる祝辞は私に取つて最も愉快なるものであります」

5 此の返答は学生の祝辞中にあつた一点を反駁したのであつて非常に面白い事であると思ひました。茲にハルナツクの真面目があらはれて居ると同時に、独逸に於ける「科学」<sup>(41)</sup>の地位が明らかにされた様に思ひました。私の考えとしては

5 科学的研究法によりて終局の基督教の真理に達する事は出来ないと思ひます。科学的研究より得たる真理は、基督教の真理と一致する事も有るべく、又一致しな事も有るであらうと思ひます。又信仰を養う為めになる事もならない事もあると思ひます、故に私は科学的信仰と云ふ様な事は六<sup>(42)</sup>かしい事であつて矢張り *Credo, quia absurditas* と云ふ立場を取るものであります。<sup>(42)</sup> 唯ハルナツクを以て代表せられし此の独逸の科学の立場の極めて尊い点は、飽く迄も科学的良心に忠実であつて、真を真として少しも遠慮しない事、そしてそれが信仰に益するや否やによりて之を曲げない点にあると思ひます。そして此の正直なる態度が却て信仰に其の常然の地位を与え、又同時に知識に其の本来の地位を与えて此の

10 両者をして其の使命を全ふせしめる事と思ひます。此の立場を明らかにするならば米国に起つた *Fundamentalist* の様な事は起らず、進化論を学校で教えないと云ふ様な事にならないだらうと思ひます。信仰は明瞭な科学的真理に目をつぶつて辛うじて維持せらるる様な貧弱なものでは無く、科学的真理を充分に真理と認めて而も尚不合理を信じ得る信仰が本當の信仰であると思ひます。此の独逸科学の根本思想を理解せずしてハルナツクを以て信仰を破壊する悪魔の如くに思ふ英米の保守的基督教者はハルナツク自身の心持ちがよく分らないのでは無いかと思ひました。

15 思はず理屈に走りましたが、ハルナツクは学者であるのみならず、又人間である事を思ひました。不幸にして個人的に接する機会が少なかつたので、此の方面を観察する事が出来なかつたのでありますが、彼に接して居る学生は實際彼を父の様に思つて居りました、<sup>(43)</sup> 私が一番感動したのは独逸が戦後の疲弊のために科学的に非常に困難に陥つて居た時

に、其の救済を世界に向かつて訴へた堂々たる文書と<sup>(43)</sup>、それから一九二三年一月仏国がルール地方を占領して其地方の主要なる独逸人を捕虜にした時の事でありました。此日ハルナツクは蒼白の顔をして教室に出て来ました。そして学生に向つて、涙を流して此の非常なる国辱について語り、かかる時には到底講義をする気は出て来ない。乍併止むを得ない。『Aber das muss veschehen<sup>(42)</sup>』と云つて講義をつづけました<sup>(44)</sup>。実に憂国の至情が其の面に溢れて居つたのを見たのであります。彼は学者であるけれども唯死せる学者では無かつたのであります。内に燃ゆるが如き人間味を持つて居つた事が之によつて明らかになり、其冷静なる頭腦の裏にある此の温かさによつて彼の学問が一段の尊さを増した様に思ひました。

最後に彼の人格が彼の学説に及ぼす影響につきて私の感じた處を一言します。彼の著書及彼の講義の中に常に私の感ぜざるを得ざる点は、彼の人格があまりに円満であり、彼の頭腦があまりに明晰であるがために、パウロ其他の使徒達の人格の複雑さを充分に味はず、又初代教会に於ける信徒の心を充分に汲み取る事が出来ないかと思ふ様な事が屢々ありました。例へば初代教会に於けるキリストの再臨を待つ心の切であつた事の説明や、キリスト及弟子達が此の考を持つて居つた事の理由を凡て常時のユダヤ人の間に行はれて居つた終末思想をイエス及初代の教会が其まま取入れたのであると解し、然らざるに於ては、イエス自身の中に現在の神の国と未来の神の国との二つの神の国の觀念が矛盾して存在する事となり不可解であるとして居る点などは、どうしてもハルナツクの理智的の性格には人生の奥底に潜む其深の罪感と之より生ずる現世に対する絶望との意味が甘く取れないからであらうと思はれます<sup>(45)</sup>。又教会書簡の中にパウロの筆になる部分と然らざる部分とがありとする理由として「教会発展の程度がパウロ時代としては進み過ぎて居る点」を挙げる事は歴史的考證として有力であらうと思はれます<sup>(46)</sup>、其の他の理由として「パウロらしからざる文句が入つて居る事」<sup>(47)</sup>を挙げ而してパウロらしいと云ふのは「ロマ書コリムト前後書ガラテヤ書に現れた様な思想及文勢」<sup>(48)</sup>を意味すると説く点などは歴史的考證文献的説明の範圍を脱して、ハルナツクの人格を以てパウロの人格を解釈し、パ

ウロの人格がロマ書以下の所謂真正なる書簡 *echte Briefe* 以外の書簡を書く程多方面であり得ないと考ふるより起る事であろうと思はれます。茲に多くの考證を挙げて論ずる場合には有りませんが、彼の講義をきいて居る間に其の種の感じを受けた事は再三に留まらなかつたのであります、要するに純粹に客觀的真理と云ふ様なものは有り得ないのであつて、如何に安逸の科学でも矢張り学者の主觀の外に完全に出る訳に行かず、殊に神学の如きは多くの場合に於て其人の信仰や人格が其の学説の背景を為して居る事が付かずに居られなかつた次第であります。そこで信仰と智識、信仰の客觀的妥当性等に関する種々の重要問題が、ハルナツクの講義をきき乍ら種々心の中に湧いて来て之について考へさせられました。

要するにハルナツクは或る意味に於て安逸の善き方面の代表者であると思ひます、其の科学的真理に対する忠実さ其学識其の愛国心而して其の缺点すらもよく安逸の持つて居る缺点を代表して居ると思ひます。安逸が彼を国品の如くに考へて居るのも無理はありません、彼は決して保守的基督教者が考へる様な悪魔の隊長では無く、人間として立派な人であり而も同時に人間の不完全さを具へて居る稀代な学者であると云ふべきであると思ひます。(をばり)

## 注

(1) 本原稿は二〇〇八年二月一六日にアウクスブルク大学哲学・社会学部で行つた講演原稿の翻訳で、ドイツ語の講演要旨は、*Uni. Press, Universität Aausburg, 1 (2009), 5-14* に掲載されてゐる。

(2) 秋山 操『基督教会(デイサイプルス)史』昭和四八年 基督教会史刊行委員会 六九頁

第一号には宮崎による「『聖書之道』の「宣言」という文章があり、ストーン・キャンベル運動に基づく「聖書主義」についての解説がなされている。ちなみにこの「宣言」については翌週の『福音新報』で植村正久が痛烈な批判を書いている。

- (3) 同右 四九頁
- (4) 同右 一六頁より再録
- (5) 同右 二四頁
- (6) 同右
- (7) Survey of Service, Disciples of Christ, 1928 by The Christian Board of Publication. これは「基督教会(ディサイプルス)」が世界規模で行った事業調査をまとめたもので、日本での調査結果は「日本における基督教会の方針」(ガリ版刷り八九頁)としてまとめられている。
- (8) 秋山 操『基督教会(ディサイプルス)史』一三九頁
- (9) 「基督教会(ディサイプルス)」派の鶴岡教会のこと。現在に至るまで鶴岡市の若葉町にあるので、通称若葉町教会と呼ばれている。正式には「鶴岡基督教会」と称していた。
- (10) 白井為治郎氏は明治四二年四月から大正七年一月、また大正一四年四月から昭和一七年六月まで鶴岡教会の牧師をしている。
- (11) 『永遠の生命』第三六三号 昭和三六年一二月号 引用は『黒崎幸吉著作集 5』(新教出版社 四一八頁)。また同号には以下のようにも書かれている。鶴岡に帰京して「はじめの間は二、三の著作と信仰の友人たちとの集会和、そして時には白井牧師の(鶴岡基督)教会を助けることを専らの仕事としておった。」
- (12) 『永遠の生命』第三六〇号 昭和三六年九月 『著作集』第5巻 二九四頁
- (13) 同右
- (14) その後の黒崎幸吉の生涯と思想については『黒崎幸吉著作集』第5巻収録の「恩寵の回顧」を参照のこと。
- (15) 「私は鶴岡に前から開かれておった諏訪君や大滝君の集会に加えてもらった。この集会は前にもちよつと触れたとおり、中には教会の牧師や長老も加わり、会員の宅を巡って開かれる聖書研究会であった。……このような不変な根強い信仰の

グループは、決して数多は見得ないであろう。大滝徳蔵君や、現在姫路で独立教会を建てておられる永井貞雄君や山形相互銀行取締役の白崎君その他若葉町教会の長老阿部君や伝道婦村井姉なども皆その当時の会員であった」(『著作集』四二二頁)。このような交流が本小論を生み出したものと推測せらる。

- (16) 『新世』大正一五年四月号 五二頁上段
- (17) Vgl. Friedhlde Krause, Menschen Bücher und Bibliotheken. Adolf von Harnack und seine Familie in: Marginalien. Zeitschrift für Buchkunst und Bibliophilie 170 (2003), 26-43, 171 (2003) 3-21
- (18) Vgl. H. Cymorek, F. W. Graf. Zwei unbekannte Texte Agnes von Zahn-Harnacks über ihren Vater, in: Mitteilungen der Ernst-Troeltsch-Gesellschaft 17 (2004), 83-94
- (19) 父ネオテミナス・ホルナツクにこころはズラの文藝を参照のハル。Volker Drehsen, Konfessionalistische Kirchentheologie. Theodosius Harnack (1816-1889), in: Profile des neuzeitlichen Protestantismus. Bd.2, Kaiserreich Teil 1. (hrsg.) F. W. Graf, Githersloh 1992
- (20) Vgl. Hacik Rafi Gazer, Adolf von Harnack und die armenier Betrachtungen zu einem wissenschaftlichen Aussusch um die jahrhundertwende, in: Meline Pehlivanian (hrsg.), Armenisyn die menschen genant. Eine Kulturbegegnung in der Staatsbibliothek, Berlin 2999, 173-200
- (21) ホルナツクの著作文献目録については、とりあえず、Friedrich Smend, Adolf von Harnack. Verzeichnis seiner Schriften bis 1930. Mit einem Geleitwort und bibliographischen Nachrichten bis 1985 von Jürgen Dummer, Leipzig 1990を参照のハル。
- (22) Paul Tillich, Adolf von Harnack. Eine Würdigung anlässlich seines Todes, in Gesammelte Werke, Bd. XII. Berlin 1971, 85
- (23) Trutz Rendtorff, Vorwort, in: Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums. Herausgegeben und Kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh 1999, 28
- (24) Wolfgang Trillhaas, Vorwort, in: Adolf von Harnack, Das Wesen des Christentums. Mit einem Geleitwort von Wolfgang Trillhaas, Gütersloh 1985 (2. Anfl.), 13
- (25) ハの史にこころはW. Hartkopf und G. Wangermann (hsg.), Dokumente zur Geschichte der Berliner Akademie der Wissenschaften von 1700 bis 1990, Heidelberg, 1991に詳細に論じたいハル。

- (26) マックス・プランク研究所とハルナックとの関係については Jürgen Renn, Giuseppe Castagnetti, und Simone Rieger, Adolf von Harnack und Max Planck. Berlin: Max-Planck-Institute für Wissenschaftsgeschichte 1999 (=Preprint Max-Planck-Institute für Wissenschaftsgeschichte 113) を参照(シ)ル。
- (27) ハの点については Adolf von Harnack. Wissenschaftspolitische Reden und Aufsätze. Zusammengestellt und herausgegeben von Bernhard Fabian, Hildesheim 2001 収録のハルナックの文部行政とアカデミシナーの議長としての仕事、またマックス・プランク研究所の運営、さらには神学部の有り方に関する諸論文を参照のこと。
- (28) ハの点については Stefan Rebenich, Theodor Mommsen und Adolf Harnack. Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts. Mit einem Anhang: Edition und Kommentierung des Briefwechsels, Berlin 1997 を参照(シ)ル。
- (29) Trutz Rendtorff, Adolf von Harnack und die Theologie. Vermittlung zwischen Religionskultur und Wissenschaftslultur, in: K. Nowak/O.G. Oexle (hg.), aao, 397ff.
- (30) Vgl. Adolf von Harnack, Wissenschaft und Kultur (1920), in: Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik, 15 (1920), 100-106
- (31) 最初に英語で書かれた Adolf von Harnack, The Crisis of the German Science, in: The Nation and the Athenaeum, 2. Dez. 1922 はその典型的な論調である。
- (32) 「ヴァイマルのロンター世代」については F. W. Graf, Annihilation historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik, in: Jahrbuch des historischen Kollege 2004, München 2005, 49ff. を参照(シ)ル。
- (33) Vgl. Briefwechsel zwischen Karl Barth und Adolf von Harnack, in: Anfänge der dialektischen Theologie, Teil 1, hg. v. J. Molmann, München 4. Aufl. 1977, 323-347
- (34) この点については拙論「ゲオルク・シンメルと現代神学」、『聖学院大学総合研究所紀要』四二号(二〇〇八年)及び「神学部外の神学」、『聖学院大学総合研究所紀要』四三号(二〇〇八年)を参照のこと。
- (35) 『永遠の生命』第三六〇号 昭和三六年九月(引用は『著作集』5 四〇四頁)
- (36) Adolf von Harnack, Die Entstehung der christliche Theologie und des kirchlichen Dogmatik, Leopold Klotz Verlag, Gotha 1927,

(37) 本論文は『新世』大正二五年六月号の二八〇三二頁(最後の四行のみ二七頁下段)に掲載されたものである。『新世』を編集兼発行人は畑中岩雄がとめ、新世社より月刊の雑誌として刊行されていた。

(38) 黒崎幸吉のベルリン大学時代については、彼自身『永遠の生命』(第三六〇号 昭和三六年九月)で次のように述べている。「ベルリンは首都であり、また大学も大きいので、私は先ずベルリンを選んだ。入学は願書を出して二、三の質問に答えただけで割合に簡単に許可されてベルリン大学の講義を聴くこととなった。(原文改行)〔アドルフ・フォン・〕ハルナツクの概説教会史と新約聖書序説、〔カール・〕ホルの教会史」と教理史、〔ラインホルド・〕ゼーベルクの教理学II、〔アドルフ・〕ダイスマンのヨハネ伝およびヨハネ書研究、〔ユリウス・〕リヒターの『キリスト教国とキリスト教』および『使徒パウロとその伝道および伝道書簡』という講義を聞くことにした(引用は『黒崎幸吉著作集 5』(新教出版社)四〇二頁)。

またベルリン大学の講義目録によればハルナツクは定年を延長され、一九二二/二三冬学期と一九二三夏学期には、博士候補生の講義の他に、「教会史概説」と「新約時代史」の講義を行っている。Vgl. Staatsbibliothek Berlin Preussischer Kulturbesitz, Nachlaß Adolf von Harnack, Kasten 45 中の記録については R. vom Bruch, Adolf von Harnack und Wilhelm II., in: Kurt Nowak/Otto Gerhard Oexle (Hg.), Adolf von Harnack, Theologe, Historiker, Wissenschaftspolitiker, Göttingen 2001, 23ff. を参照のこと。

(39) 引退後のハルナツクは週に二度大学に行き、それぞれ午前中に六〇分(現実には四五分)の講義を二コマ連続で行っていた。演習は博士候補生のために不定期に行われており、大学のシラバスへの公示はなかった。彼は既に大学教授としての給与はなく、また大学行政に関与する資格もなかった。しかしアカデミーの会員として大学で講義することは可能で、ハルナツクが申し出ることによって生涯講義することができた。博士候補生の指導は、かつて所属した講座がなくならない限り、一度正教授になった者は引退しても続けることが出来た。

(40) この祝賀については Adolf von Harnack, Wissenschaftspolitische Reden und Aufsätze, Zusammengestellt und herausgegeben von Bernhard Fabian, Hildesheim 2001 を参照のこと。一八七三年にハルナツクはライプツィヒ大学で学位を取得しているので、学位受領五〇年の祝いは一九二三年に行われた。

(41) 「科学」は Wissenschaft の訳であると思われるが、この場合、それは日本語のニュアンスでは「学問」の意味もあり、今日

では「学問性」などという言葉で意味しているものに近いと思われる。

- (42) このアンセルムスの言葉については Jaroslav Pelikan, *The Christian Tradition, A History of the Development of Doctrine*. Vol.3, *The Growth of Medieval Theology (600-1300)*, Chicago, 1978, 142ff. を参照のこと。
- (43) この時期に書かれたハルナックの同題の文章については Adolf von Harnack, *The crisis of the German science*, in: *The Nation and the Athenium*, 32 (1922), 347-349; ders., *Deutschland und der Friede Europas*. In: *Neues Wiener Tageblatt*, 29. Jan.; ders., *Offener Brief an Viscount Haldane über die Krisis der deutschen Wissenschaft*, in: G. Schreiber, *Die Not der deutschen Wissenschaft*. Leipzig, 137-140 などのことである。
- (44) この点については黒崎は次のようにも述べている。「果然、翌一九二二(大正一一)年一月、仏白連合軍がルール地方を占領してしまった。ドイツが約束した賠償金を払わないからという口実からであった。その時のドイツ人の憤慨と興奮は物すごいものであった。デーヤガルテンに多数の群集が集まってデモっておった由、私は行かなかったが、ある私の知っている日本の官吏が高い所からその光景を写真に撮ろうとして群集に引き降ろされ、あわや袋たたかいにされそうになったこともあった。ちょうどハルナックの講義の日で私も出席しておったところ、先生は先ず非憤の面持で連合軍の非礼を責め、『もう講義などはする気がなくなつた。しかしこれはやめるわけにはゆかなか』(Aber das soll geschehen) と言って講義をはじめたのであった。ここに七十五歳の老愛国学者を見ることのできてうれしかった」(『永遠の生命』第三六〇号 昭和三三六年九月)。引用は『黒崎幸吉著作集 5』(新教出版社) 四〇四頁
- (45) Vgl. *Die Mission und Ausbreitung des Christentums in den ersten drei Jahrhunderten*. 2. neu durchgearb. Aufl. Mit 11 Karten. Bd.1. 2. 1904 Leipzig: Hinrichs
- (46) この引用は、正確ではないが、ほぼ同く言葉は Adolf von Harnack, *Beiträge zur Einleitung in das Neue Testament*. I. Leipzig: Hinrichs. の 75ff. に見出される。
- (47) 同右
- (48) Adolf von Harnack, *Der apokryphe Brief des Apostels Paulus an die Laodiceer, eine marcionitische Fälschung aus der 2. Hälfte des 2. Jahrhunderts*, Leipzig 1923